

Title: 「昼下がりの太陽たち」



佐藤 健太郎
1982年5月7日生まれ。身長180cm。体重80kg。
2004年、日本写真芸術専門学校に入門。
2006年「強くなりたい」と海外遠征を決定。彼にとっては結果が求められる遠征となるだろう。

● 最近のエントリー

- ☐ クチトンネルどっちらけカメラ (2006.04.14)
- ☐ 振り向けばオーマイゴッ! (2006.04.10)
- ☐ 化けの皮は、化けの皮か? (2006.04.07)
- ☐ こうしてカメラが揺られてく (2006.04.06)

● アーカイブ

- ☐ 2007年03月
- ☐ 2007年02月
- ☐ 2007年01月
- ☐ 2006年12月
- ☐ 2006年10月
- ☐ 2006年09月
- ☐ 2006年08月
- ☐ 2006年07月
- ☐ 2006年06月
- ☐ 2006年05月
- ☐ 2006年04月
- ☐ 2006年03月

● 投稿カレンダー

● カテゴリー一覧

● ブックマーク

学校法人 日本写真芸術専門学校
NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE



RSS 2.0

昼下がりの太陽たち > 2006年04月 アーカイブ

06.04.14

クチトンネルどっちらけカメラ

Tweet

いいね! 0

チェック

この間の間、毛穴から恐怖が沁み入ってくる。
とたんに、カメラなんてぶっ壊れた。
軍服もったマネキンよ、やつらの錆びたジッポを狙え!
赤星マークの革命戦士よ、いまや洞窟は社交場だ!
タイヤで作ったサンダル履いて、戦車を囲んで記念撮影!
はい笑って、3、2、1、ボム! ダッダッダッダッダッ、ナバーム!
お家に帰って「悲惨な出来事だね」同情。代々木公園でデモをして同情。
「だって、どうしようもないじゃん」でいいのか?
飯塚先生、僕の思い描いていたイメージは、どうの昔に手の届かないところへ消えてしまったようです。対象とのかわり方が随分な僕の映像は、とてもキツクなもの。
「それで、サルガドさん、あなたは何故に写真を撮るのですか?」
「きみは、何故ですか?」
「僕は写真が好きだからです」
「私も君と同じだよ」
さすが名答顧問。とても簡潔なお答えだ。惚れ惚れする。溜飲が下がる。底知れぬ楽天主義に思わず義が憤りでそうだ。アンガージュマン? 笑わせるな。そういう会話の類廃を許してきた生徒としての僕の立場、決して忘れない。
「鈴木さん、あの秋山選手との張り手は凄かったですよ」
「だって、橋の張り手は頭くるから受けたくないし、秋山の張り手は避けたくないだもん、ムカつくから」
この覚悟。あるか?
ときに優しく、ときに侮蔑し、
ときにカメラを向け、ときに目をそらす。
そう、僕もそちら側に突っ立て眺めているから絶望である。
そんな人間、疑わざるをえない。ああ、矛盾を矛盾でなくしたい。
ただ、クチトンネル怖い。とても暗い。今はそんなことしか示せない。

カテゴリ:

post by 佐藤 健太郎 | 日時: 2006.04.14 | [パーマリンク](#)

昼下がりの太陽たち > 2006年04月 アーカイブ

06.04.10

振り向けばオーマイゴッ!

Tweet

いいね! 0

チェック

いつものように、レストランオーナーのケリーとネットカフェ従業員トムと銀行員ウオットともに、焦げた鶏肉をむしって食らい、ダンスホールでひと汗かいた後、房楊子をくわえながら、造園デザイナー石川氏とビヤホイを飲む。俯瞰すれば、気分はさしずめ「永遠の語らい」のマルコピッチである。異言語が飛び交う心地よき時間。だが。
石川氏は20年以上前に日本の大手電気会社を辞めてヨットに乗り込んだという。7年間ヨットで旅をして海賊にも出くわしたらしい。彼は言う。「俺はとっくに日本なんか捨てたよ」いつか耳にしたセリフ。「日本は遅れすぎだ」これも然り。話を聞く限り、その調子はどこか鋭い。
現在、僕も日本という国家の外にいる。揚げパンをかじりながら内側を覗いてみる。どれどれ、ああ、それは例えば学校でよくある遅刻の状況に似ている。生徒がいかなる理由で遅刻したとしても、待っていた先生にとっては、授業を軽視されたことになるという状況。だが、生徒本人は気づかない。この場合、生徒よりも先生の方が、その生徒自身を把握していることになるのだろうか。とにかく、本人は疎いのである。気後れしてくる。彼らの家が建つほどの高級カメラを容赦なく向け続けるなんて、コミカルでファニーじゃないか。ああ楽しい研修。まるで裸の大様だ。

カテゴリ:

post by 佐藤 健太郎 | 日時: 2006.04.10 | [パーマリンク](#)

昼下がりの太陽たち > 2006年04月 アーカイブ

06.04.07

化けの皮は、化けの皮か?

Tweet

いいね! 0

チェック

「郷に入っては郷に従え」であろうか。今朝、ハンバイ通り沿いを散歩しながら、ある少女に声をかけた。彼女の黒く凝った瞳がとてまあだっほく見えなからだ。彼女は僕を視るなり手を突き出してきた。口ごもる。仕草が散らかる。気が滅入る。ベトナムではよくあること。では、彼女の目に、僕はどうか映ったのだろうか。ニッポンジン、オカネモチと映ったのだろうか。そうだとしたら僕のこの肥えた人相は、とても醜い。ぞっとする。この人相、なんとか解明したい。

思いあたる問題は2つある。ひとつは、少女の目に僕の姿が、金持ち日本人として映ってしまった日本という国。少女と僕が、今日、同じ土俵に上がっていないことである。ふたつ目は、そのことに気づかなかった僕の脳みそ。この傲慢きわまりない撮影行為は、少女に対する侮蔑であり差別であるということに気づかない、イカレボンチ脳みそである。これでは撮影交渉どころか、単なる売春と変わりないではないか。露出もヘチマもありゃしない。僕はこれから、ゆすりゆすられのかかわり方を認め続けていくのか。思いあがりも甚だしい。

「金で解決できることは金で解決」整然と五十嵐先生は言う。それは今朝の僕の場合でも適用可能な発言であろうか。たとえ、その方法を遂行したとて、その時に吐き気とともに噴出してくる自己欺瞞を、どのように処理しろというのか。以前、カンボジア研修の折に、同等の質問を藤井校長先生に問うたことがある。「そりゃ、君の考え過ぎじゃないか」と、ひとこと。考え過ぎ、か？取るに足らないこと、か？本郷先生のいう「自分に対しての責任」と大森隆男の「高山、あばよ」が重くのしかかる。

カテゴリ:

post by 佐藤 健太郎 | 日時: 2006.04.07 | [バナーリンク](#)

昼下がりの太陽たち > 2006年04月 アーカイブ

06.04.06

こうしてカメラが揺られてく

Tweet

いいね! 0

チェック



むすんで ひらいて 手をとって むすんで
またひらいて つきはなして 近づいて くい込んで
かみちぎって ほうり投げても また拾って 捨てて

カテゴリ:

post by 佐藤 健太郎 | 日時: 2006.04.06 | [バナーリンク](#)

昼下がりの太陽たち > 2006年04月 アーカイブ

06.04.04

ベトナム到着、死語フラッシュ!

Tweet

いいね! 0

チェック

空港のベンチで生あくびをしながら思う。ベトナムといえど？ええと、ベ平連。死語だな。「我々自身のなかにベトナムをつくらなければならない」のゴダールや「ヒロシマ」「ヌベール」のレネを尻目に、ベトナムコースの僕が、イメージを実体的にみれないのはあたり前である。アジャパー。しこしこカメラを向け、あれよあれよと映像が撮れてしまう。僕の丈夫で長持ちブルジョワレンズが、これではただの不条理な空洞である。簡単に言い換えるならば、「破壊なくして創造なし」真世紀創造の旗揚げ戦にもかわりなく、いつもながらの受け身を披露してくれたノーフィアー大森に似ている。やはり、僕のやり方は現実には即してない。ああ、いやらしい。扇千景さん、わたしにもうつせますか？

カテゴリ:

post by 佐藤 健太郎 | 日時: 2006.04.04 | [バナーリンク](#)

昼下がりの太陽たち > 2006年04月 アーカイブ

06.04.03

そぞろに、しっぱなし

[Tweet](#)

[いいね！ 0](#)

[チェック](#)



窓を開けた。たまげた。コンクリートの地盤から、沸々と煮え立つ台北の体臭が噴きあがってきたのだ。目が驕む。この臭いの緒はどこだろう。台湾最後の夜だから、こいつら嗅いでやりたくなった。いま僕は、「こいつら」と書いた。ならばこそ開けっ放しにして、しばらく嗅いで！

カテゴリ：

post by 佐藤 健太郎 | 日時: 2006.04.03 | [パーマリンク](#)